

# 東京古田会ニュース

— 古田武彦と古代史を研究する会 — No.220 Jan.2025

<http://tokyo-furutakai.com/>

e-Mail: [saitaka7078@yahoo.co.jp](mailto:saitaka7078@yahoo.co.jp)

代 表：安彦 克己

編集発行：事務局 〒212-0024 川崎市幸区塚越3-370 斎藤 隆雄 TEL/FAX 044-522-7500

郵便振替口座 00110-1-93080

年会費 4千円

口座名義 古田武彦と古代史を研究する会

## 目次

\* 古田氏の旧説撤回問題（上）

世田谷区 国枝 浩……①

\* 「難波の宮」発見逸話

— 山根徳太郎氏の苦難 —

京都市 古賀達也……⑤

\* 古田武彦記念古代史セミナー

2024 報告

日野市 橋高修（文責）……⑧

\* 富雄丸山古墳の被葬者は宮崎から

嫁いだ者で、蛇行剣は贈答品か

吉川市 堀口啓一……⑪

\* 古代史エッセー 83

日本国号と禰軍墓誌

日野市 橋高修……⑫

\* 「東日流の旅」に参加して

仙台市 広幡 文……⑬

\* 花の女子旅雪中行軍（四人旅）

寄居町 山田まゆみ……⑮

\* 和田家文書備忘録 10

弘前市相馬の長慶天皇陵

港区 安彦克己……⑯

\* 古代史コラム No. 1

「大作冢」AIと会話して

世田谷区 國枝 浩……⑱

\* 「東京古田会」月例会報告⑨

文責 新保高之……⑲

\* お知らせ

……⑳

## 古田氏の旧説撤回問題（上）

世田谷区 国枝 浩

### はじめに

この論考は古田氏の学説を単に批判するという過去に向かった議論を指すものではない。古田武彦氏という影響力が大きい研究者の説が、日本の古代史における極めて大事な事項について二つ（ないし三つ）の回答を与えていたことに對して注意を喚起するものである。というのも、古田氏の学説を支持する研究者が、「古田説によると」、「古田氏が」と述べていることに基づけば、などの言葉を安易に使うことができないという問題を孕んでいるからだ。二つある古田氏の説のうち「どちらの説を支持するのか」を明らかにしなければならぬ状況が確実に存在する。

それだけではない。二つの回答が提出された問題について「古田氏の一方の説を支持する」場合には、「なぜ一方を支持し、他方は支持できないかの根拠」も示さなければならぬいからである。古田氏を支持する研究者が、何らの理由も示さないで一方の説（旧説の場合もあれば、新説の場合もあるが）に基づき議論を始め

ているのを見ると、その「せっかくの論考をそれ以上は読む必要があるのか」という気持ちにさせられる、そのような場面にたびたび出会うからである。また、あつてはならないことであるが、二つある古田氏の説のうち、「自分にとって好都合の説を採用して、もう一方には触れない」論考も散見する。この問題点については別稿で議論する予定である。

同時に古田氏の議論の中で、氏自身が旧説に問題点があったことを指摘し、新説を提示している場合もあるが、旧説の撤回の表明もなく、また旧説撤回の理由も明示されないで新説が登場する場合もある。さらに、その中には氏による旧説も新説も共に論拠不十分で支持することができないという場合もある。この論考で取り上げるのはこちらの問題である。

古田氏の思考は柔軟であったのである。「ああも考えられる」、「こうも考えられる」など幾つもの可能性を見出し、それらから取捨選択し、その上で可能な解決法を提示していたのである。読者や講演などでの質問や、提案などにも耳を傾けたりもした様子もうかがえる。

私は古田氏のことを、特に問題提起者としての側面を高く評価している。通説なども含めて、通常は当たり前前のこととして等閑視されてきた、しかし深く究明しなければならぬ日本古代史の諸課題を、解決の道を

見つけることがどれだけ困難であろうとも提起し、解決の可能性を複数個考察し、「現時点ではこれがより合理的な解釈だ」として提示していったのであろうと思われる。

大事なのはこうであろう。古田氏は可能な解決法を複数個提出した問題が幾つかあったということ、そしてそれらの問題は古代史上の難問であつたこと、その事実は踏まえなければならぬ。それらを氏の混乱として捉えるのは容易である。しかしそれは消極的な姿勢に過ぎない。私たちは古田氏から問いを寄せられている。「どれを有力な解決方法と考えるか」と。そのように受けとめる必要があると私は考えている。

また、当然のことながら氏の提示したそれぞれの解決の成否も見極める必要があるだろう。さらに、問題によつては氏のまだ提起していないかつた解決方法もあるのではないか、また氏が提起していないかつた古代史の課題が存在するのではないか、など。私たちの研究意欲を掻き立てる研究材料として氏の「旧・新両説問題」を受け止めたいと考えている。

以下の一、二、三、五、六、七、八では①が旧説、②が新説とした。また、四、では①、②が旧説、③が新説にある。ただし、氏が自ら旧説を撤回し、新説を提示している場合を除けば、

どの説が旧説または新説かについては、厳密なものではなく、私の判断で分類したに過ぎない。大事なことは、幾つかの問題で古田氏によつてそれぞれ二つ（ないし三つ）の説が提出されていることを指摘し、その両説の検討を行うものである。

紙幅の都合上、一・から四・までが本稿の（上）、五・から八・は（下）で論じることになる。

## 一・万葉歌 第一巻第二歌 山跡、八間跡の読み方と意味

次の（一）の中の読み方は何でしょうか？

山常庭 村山有等 取与呂布

（一）には 群山あれど とりよろふ

天乃香具山 騰立 国見乎為者

天の香具山 上り立ち 国見をすれば

国原波 煙立竜

国原は 煙立ち立つ

海原波 加万目立多都

海原は かまめ立ち立つ

怜可国曾 蜻嶋 八間跡国者

うまし国ぞ あきづしま（一）の国は

（注一）

①この歌で「ヤマト」と通説で読まれ、「大和」のことと解釈されているのは「山常」、「八間跡」である。これに対して氏は言う。「山常」、

「八間跡」の読みが「ヤマト」にな

るのは、「いずれも、他に例がない」。氏の読み方である。「山常」山根やまね」のほうが自然な読み方で、意味は「山並み」。「八間跡」浜跡はま」と、意味は別府湾の「浜」

（注二） いずれも地名とも、または固有名词とも解釈されていない。普通名詞である。

（注一） 古田武彦『古代史の十字路―万葉批判』 第三章 豊後なる「天の香久山」

の歌 東洋書林より、2001. 4. 20

第一刷 55頁、

（注二） 同書 72頁

まず、この歌の前書きでは、作歌者は第三十四代の「舒明天皇」とされる。この歌が天皇によるもの、そして大和で謳われたものという印象をもたせる役目を果たしている。しかし、いくつもの違和感が生じてくる。すでに古田氏が詳細に述べたことなので、ここでは簡潔に、問題点の幾つかだけ挙げておく。

まず、「山常」、「八間跡」が共に「やまと」と読まれ、「大和」と解されている。「山常」、「八間跡」は「やまと」とも読めるからといって読み方は「やまと」に決まりとしていいものではないし、さらに「大和」に決めてよいものではない。「そうとも読める」ということは、「別様にも読める」ということでもある。

少し遊び心のある人なら、邪馬臺

（台）国はどこにあるかという問いに対して、八幡平（はちまんたい）だと答えるかもしれない。八幡平は「やまたい」とも読めるよ、と。さらに、原典の「山常」、「八間跡」は固有名词であるとも、普通名詞であるともいえるだろう。

ここでは、現行テキストの「大和」が原典では「山常」、「八間跡」という文字であつたという指摘にとどめておく。しかも異なつた字を当てている。何の予備知識もなく「山常」、「八間跡」を両方とも「やまと」と読める人はまずいないであろう。現代語で「大和」と訳せる人もまれであろう。「やまと」、「大和」の呪縛から解放されて、歌を第一次資料とし、歌だけを先入観なしに味わうと、歌の趣は全く異なるものとなるはずだ。

参考のために、上の万葉歌の古田氏による現代語訳を記す（注）。

山並みには、多くの山々が群がっているけれど、なかでも一番目立ち、整っているのは、天の香具山だ。

登り立って、国見をすると、国原には煙が一面に立ち上り、海原には一面に鷗が飛び立っている。

素晴らしい国だ。安岐津（あきつ）の島の

この浜跡（はま）の国は。

（注）『古代史の十字路』ミネルヴァ書房 72頁

② 氏によって理由が挙げられることなく、旧説を無視して出現した説である。『九州王朝の歴史学』（駿々堂 153頁）、ミネルヴァ書房128頁）では、「ヤマト」と読める文字の例として、「山跡」と共に「山常、八間跡」が挙げられている。氏がこういう根拠で持ち出したのかも不明であるし、私にとっても説明のしようがない問題である。ここでは、旧説①から新説②への変更にについての根拠は示されていない、と指摘するにとどめたい。

## 二. 万葉歌「前書き」についての資料批判、その履行と不履行

①先に取り上げた一・の万葉第二歌における歌の前書き批判についてである。『古代史の十字路』ではこう語られていた。

「私の方法によってみよう。“前書き”は第一史料として、歌の〈前提〉とせず、第一史料。直接史料としての〈歌〉自身を精視する。この方法だ」と。そして、氏の主張の要点だけを簡潔に示す。通説的には、この歌の前書きには舒明歌とある、そこで「山常」、「八間跡」という歌詞が「やまと」と読める。疑いもなく、この歌は近畿ヤマトで詠われたものだとしてきた。

(注1)

これに対して古田氏は、近畿ヤマトの「香久山」が歌の天の香久山に相應しくない、海原もない、他の場所でも詠われたはずだという強い確信のもとに、大分の鶴見岳こそこの歌の歌われた現場である、したがってこの歌の作者は舒明天皇ではないと結論付けた。さらに氏による前書き批判は続くが、ここでは省略する(注2)。

②ところが同じ著作、『古代史の十字路』で万葉第三歌ではどのように語られていたであろうか。ここでは自分の「方法」であるはずの資料批判が行われていない。つまり、第三歌が舒明天皇に係る歌だという前提で議論が開始されているからだ(注3)。

また2000年1月の講演、「壬申の乱の大道」(注4)でもこれと同様に万葉第三歌は舒明天皇が登場する歌として議論が進められている。

それは何故か。「第二歌の前書きに舒明天皇の歌」とあったからに他ならない。その「流れで」作者が書かれていない第三歌も舒明天皇に関わる歌とされた。前説撤回どころの話ではない。同一の著作中の出来事である。自説についての物忘れの類である。同じ著作であったとしても、各論文あるいは各章の執筆時期はかなり違っていたのかもしれない。だから、章が異なると、他の章の内容を失念するということなのか。あるいは

想像するに、古田氏は研究、執筆、講演、質問への回答、インタビュート多忙ではあっただろう。がしかし、学説については「忙しかった」では済まされないし、また以前に書いたことを忘れて以前とは異なる「学説」を展開し書いた、などということがあつてはならないことである。「前書きに対する資料批判」を厳格に行うか否かなどは、研究者の根本姿勢、思想そのものに関わるものである。

私はこれを「同じ著作内部で起こった旧説撤回」と呼ぶ。

(注1)『古代史の十字路』第三章 豊後なる「香久山」をさかのぼる 48頁

(注2) 同書 196～214頁 第八章

《雷山の絶唱》では、万葉巻三、二三五歌の柿本人麻呂歌、雷岳歌が取り上げられ、前書きなどへの資料批判が行われている。近畿ヤマトで詠われている歌ではなく、福岡県にある雷山での歌とされる。

(注3) 同書 第七章 《大宰府の「中皇命」の歌》 147頁

(注4)「壬申の乱の大道 第三」この講演は活字になっていない。以前は、古田史学の会の冊子で閲覧可能であった。

## 三. 東鯉人の居所、東鯉人の国は銅鐸圈に相応しいか

① 東鯉人は銅鐸圈にいた

ア. 消失期の一致が「同じ存在」の根

拠

「東鯉人の所在地＝銅鐸圈」についての古田氏の見解である。古田氏が注目した一つの論拠は、銅鐸の作られなくなった時期と東鯉国が史書から消滅した時期と合致していたことであつた。両者は「共に三世紀頃に至って突然消えてしまった存在」であり、共に史書類から「蒸発」した、と(注)。

この論証方法は、かなり荒っぽいと言わざるを得ない。弥生時代は何百年と続く。弥生の後半でも三百年はある。弥生時代だから時期が同じとは言えない。また、時期がピタリ一致していたとしても消滅・消失が偶然の合致ということも当然、ありうる。例えば弥生時代における寒冷化によって二つの勢力が衰退するなどもある。十分条件が満たされずに過ぎないともいえる。「逆は真ならず」、ということである。歴史の中に同じ時代に誕生し、また同じ時代に滅亡した文明・文化はあるだろう。「時代が同じということをもって同じ事象とはこれ如何に」。

(注) 『邪馬壹国の論理』 銅鐸人の発見

突然消えた二つの存在 ミネルヴァ書房

2010年代刷 239頁。また、244頁

には、銅鐸の「東鯉人」という見出しさえ設けている。なお、私は東鯉人の国という意味で「東鯉国」と記すことがある。

イ、地理的狀況は対応しているのか。以下の問題もある。『漢書』地理志は書く。「東鯤国は呉地・会稽から東」と。東鯤国については距離が書かれていない。名前から言えば方角は「東」であろうか。

「鯤」は、魚ヘンに「是」。「是」＝ここ、あるいは辺、端。古田氏は「一番端つこ」と考える。魚を中国に貢献した、東の端つこの国ではないか、と古田氏(注)。魚を中国に献上したということは海岸に近いところになるだろう。

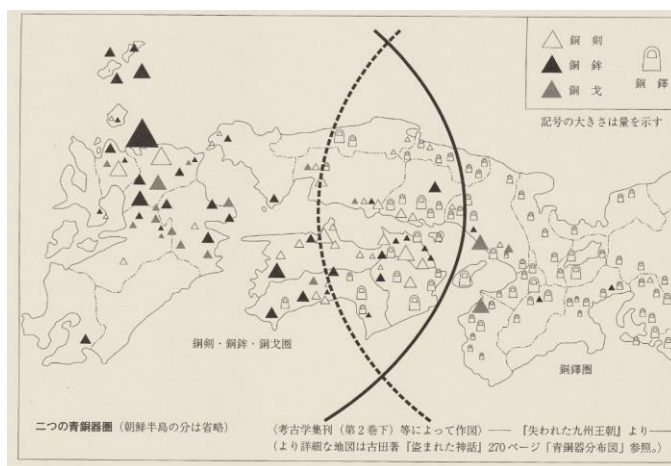
(注) 同書 229頁

会稽から東に進み、その「一番端つこ」ということは九州も可能になる。会稽郡は南北に長い。場所が特定されているわけではない。三国時代の建業(西晋の時代の建鄴、後の南京)から東を見れば、宮崎・鹿児島島の東側の海岸が「一番端つこ」になる。四国の東端も可能。高知、徳島の東岸の辺りか。近畿ヤマトを囲む地点では、「一番端つこ」には相応しくない。魚とかかわりにしても相応しくない。紀伊半島の東岸が魚に縁があり、また「一番端つこ」に相応しいか。しかし、この地が銅鐸の中心地というわけにはいかないことは次の地図が示している。

(氏によって提示された地図)

銅鐸圏は中国地方東部から近畿地方にかけ

て存在した。氏は九州を中心にした銅剣・銅矛・銅戈圏を銅矛圏と呼んでいる。『邪馬壹国の論理』2010年「銅鐸人の発見」 ミネルヴァ書房 234頁



「東」、「一番端つこ」、「魚」に相応しい場所は、銅鐸とは縁がなさそうである。「一番端つこ」で銅鐸が出土する地域も銅鐸圏の中核という状況でもない。したがって、その地域の銅鐸圏の勢力が減びたとしても、銅鐸文化全体が減びるとは考えにくい。全体的に見て、少なくとも氏が定義する東鯤人の居所が銅鐸圏の勢力とはなかなか合致しそうにもない。

② 東鯤人は九州南部の太平洋側に

いた

しかし別の著作では(注)、古田氏は「東鯤人」を近畿の銅鐸国家に当てていた時期があったが、これを撤回して、九州(特に南九州)の東岸部を中心とした領域(宮崎、鹿児島島の太平洋側)の人々という新説を打ち出した。これにより東鯤人は銅鐸圏とは無縁になってしまった。これについては、前説の何が問題で撤回されたのか、またなぜ新説に移行したのかが不明瞭である。

(注)『古田武彦の古代史百問百答』Ⅲの8「東鯤国の献見」について ミネルヴァ書房 45頁

#### 四、狗奴国の場所

『古田武彦の古代史百問百答』Ⅲ 10 〈狗奴国に関する説の変遷について〉(47〜49頁)で、古田氏は率直に自身の見解の変更を述べている。①、②が旧説、③が新説。

①最初は「邪馬壹国の南」としていたが、これは不注意によるものだとされる。

②読者からの指摘で、『後漢書』倭伝(注1)により、倭国の「東」に短里で千余里に変更。瀬戸内海領域と考える。愛媛または高知の西岸か。

③合田洋一氏との会話の途中で気づ

く(注2)。狗奴国は女王国から東に長里(短里の約六倍)で千余里に変更。博多湾岸から東に長里での千里で大坂府の茨木市・高槻市あたり。当時の「銅鐸圏の中枢部」となる。「狗奴」は「この」と読む(注3)。茨木市の東側、枚方市には「高野(この)山」、京都府の舞鶴湾近辺には「籠(この)神社」がある。

古田氏の最終的な見解は③と思われる。ここでは、自説変更の経緯は語られている。しかし、古田氏の下した判断、「後漢の時代は短里ではなく長里」という説明が理にかなっているか否かは別の問題である。

(注1)『後漢書』倭人伝の范曄は述べる。

自女王国東渡海千余里 至狗奴国 狗奴国は女王国より海を渡って東へ千余里

(注2)合田洋一氏との会話の様子は、『古代に真実を求めて』第六集 〈神話実験と倭人伝の全貌〉 41頁で語られている。

(注3)『魏志』の「狗奴」や『後漢書』の「拘奴」を「この」と読めるか否かは一つの問題である。別稿で論じてみたい。

ここでの氏の説明の妥当性、帰結の意味について簡潔に述べておく。一つは、『後漢書』倭伝には二つの里程が記されている。楽浪郡から倭国まで万二千里で、これは陳寿と同じなので短里。女王国から狗奴国までが千余里。

しかし、氏によると前者は短里で、



後者は長里。漢の時代には「長里が使われていた」というのが根拠になっているようだが、それでは前者を短里という解釈は反故にされるのだろうか。これは同じ史資料内の記述としては混乱の元でしかない。一方が短里ならば他方も短里、一方が長里ならば他方も長里でなければいけないだろう。私は共に短里と考えている。

二つは、九州勢が近畿ヤマトを制覇していない根拠が、皮肉なことに先の氏の提示した地図にも示されている。この地図はいつの時代のものであるうか。発掘調査が行われた近現代の考古資料に基づくものであるう。ということとは、弥生時代のものであるものではない。つまり、もし九州中心の銅矛勢力が近畿中心とする銅鐸勢力を征討し支配していたとすれば、銅矛勢力が銅鐸の勢力を支配した後

の状況を温存しているはずである。すると支配勢力の文化、銅矛類は近畿地方にまで伝搬されていなければならぬだろう。しかし、銅矛は近畿から出土していない。逆に、支配者は戦利品として銅鐸などを持ち帰るはずだ。銅鐸が九州から出土しなければならぬ。しかし銅鐸は九州からは出土していない。これは不可思議だ。例えば、支配国のイギリスがインドを植民地とするこ

とでカレーやお茶を自国に根付かせ、エジプトから持ち出されたロゼッタストーンが大英博物館に展示されていたような事態は起こっていない。ということとは、九州の銅矛圏は、近畿の銅鐸圏を征討支配していなかったことを意味している。むしろ両者は没交渉であった可能性すらあるだろう。(下に続く)

## 「難波の宮」発見逸話

— 山根徳太郎氏の苦難 —

京都市 古賀達也

### 一、教え子からの寄附に涙する

拙宅の書架整理により不要となった蔵書を古書店に売却し、得られたお金で山根徳太郎著『難波の宮』(学生社、昭和三十九年)を購入した。六十年前の本なので論文執筆に役立つことはあるまいと思ひ、これまで読んでこなかったが、古書店にある同書が気にはなっていたので、購入することにした。

難波宮発掘と遺構保存に至る山根徳太郎氏の功績は、大阪歴史博の特別展(注①)などで知ってはいたのだが、同書を読み、発掘費用不足や学問的に有力な批判に山根氏が苦慮していたことがよくわかった。なかでも、発

掘費用調達に山根氏が困っていたとき、教え子たちから寄附が寄せられた次の逸話を読み、胸が熱くなった。

“このように、掘りだすたびに、一歩一歩と「難波の宮」の全貌が、大阪の中心部、法円坂町の台地上に浮かびあがろうとしている。しかし、一方世間の人のなかには、まだまだこれらの成果をまったく認めない人も多い。学者のなかでも、現在までの成果では、難波の宮と認めず、わたしたちの努力を否定しようとする方も少なくなかった。(中略)

わたしは何といわれようとも、学問的成果には、深く心に期するところがあったが、ホトホト弱ったのは、研究資金の不足であった。(中略)

そのころ、昭和三十一年十月十日の日、京都のわたしの宅に史泉会(大阪商大関係の歴史研究者の会)の古い会員の方が見えて、なつかしい昔話の後、封筒をわたしの前にさし出した。

「先生、これは先生が難波の宮の発掘資金にお困りになつてゐるのをみかねて、教え子たちが持ち寄つたものです。どうぞ発掘のお役に立ててください」(中略)

「それはありがたいが、いったい誰がそのようなお金をくれたのか、知らせしてほしい。名前を教えてください、で

ないとぼくは受取れない」(中略)

この後、わたくしは、それらの人に会うたびに名前を知らせてくれるように、幾たびか申出た。そして翌三十二年の八月になつて、やつと醸出者名簿が送られてきた。開いてみると、みな教え子ばかりで、一五〇人の名が記されていた。一人一人涙をおしぬぐいながら名簿を見つづけていたところ、その中の一人に、豊子という婦人の名前がある。その御主人はよく知っていた人であるが、さきごろ交通事故で世を去られた方である。

その人の未亡人で、遺児を抱えて苦勞していると聞いていた。そのような方まで募金にに応じてくださると知つては、もはやわたくしには堪えられないことではない。このようなことにならねばならないのならば、研究は止めにする。「どうぞこのような浄財の募集はしないようにして下さい」と、恒藤先生(大阪商大大学長)にお願いしたことであつた。(中略)

このように浄財の寄進によつて、昭和三十二年八月十二日から十月三十日まで実施した、第七次発掘には、じつに予想外の大きな成果があつた。近世大阪の発祥と目すべき石山本願寺の発見である。“一四〇〜一四三頁

これを読み、古田先生が「邪馬台国」徹底論争シンポジウムや和田家

文書保管(注②)のための金策に苦勞されていたことを思いだしたものである。

## 二、喜田貞吉『帝都』の異論

山根氏は発掘費用不足の他に、学問的に有力な批判にも苦しんでいた。それは難波宮を大阪市北区の長柄豊崎にあつたとする、現存(遺存)地名を根拠とする古くからある説であつた。『難波の宮』にそのことが紹介されている。

“しかしそれには有力な異論が提出されていた。喜田博士の名著『帝都』に

孝徳天皇大化の新宮は、実に此難波宮にて行はれた。精しくは難波長柄豊崎ノ宮と申す。今の豊崎村大字南北長柄は、実に其の名を伝へて居るものであろう。此所に始めて支那の長安城に模した新式の都城が経営された。” 五八頁

“喜田博士の説にしてもそれを支持しようとして唱えられた天坊翁の説にしても、どれも人を納得させることはむずかしい。この種の考え方は、享保十九年に完成した「五畿内志」の所説にもとづいて考案されたもので、天満の北方に長柄の村名のあることに注意をひきおこし、一方、

上町台地を都城建設地として狭隘と感じて説を構えられたことであつた。六一頁

“重圈文系軒瓦にもとづく様式論を最初に考へつた時代には、難波の宮址の所在位置について、学者のあいだに定説はたつていなかったのである。あるいは現大阪城址がそこだといひ、あるいは天満橋の北方元長柄村の名称にこだわつて立てられた説が強く主張せられた。” 一二〇頁

“ところで、このように第一〇次の発掘を、その成果からみて記述すると、いかにも易々楽々と仕事になされたかのようにも思われよう。しかしことは決してそのような、なまやさしいものではない。最近になつて聞いた話であるが、世間ではずいぶんわたくしどもの仕事に、あれこれとケチをつけていたのである。あんな所に長柄豊崎の宮があるはずはない。長柄は明瞭に天満の北で、長柄村の名は古い。人柱で名高いナガラを法円坂町にもつていくなどはムチャだ、とひとかどの先生方が非難していられたのであつた。「山根さん、長柄は天満の北が正しいのではないでしようか」と申された博士もあつた。” 一八三頁

山根氏による発掘調査で、法円坂

から大型宮殿跡が姿を現し始めても、難波長柄豊崎宮を北区の長柄豊崎にあつたとする説が有力だったのである。

## 三、置塩章氏が発見した二枚の瓦

喜田氏の『帝都』には、「難波長柄豊崎ノ宮と申す。今の豊崎村大字南北長柄は、実に其の名を伝へて居るもの」とあり、当時の学界では最有名説だつたようだ。私財や寄附金を投入して法円坂の発掘を続ける山根氏に対して、「長柄は明瞭に天満の北で、長柄村の名は古い。人柱で名高いナガラを法円坂町にもつていくなどはムチャだ」という批判も寄せられていた。

この批判は文献史学の視点によれば、『日本書紀』孝徳紀に見える孝徳天皇の宮殿名「難波長柄豊崎宮」を史料根拠として、それが現存地名の「長柄」「豊崎」(大阪市北区)と対応し、その地の方が狭隘な上町台地よりも広く、王都王宮の地にふさわしいとする、極めて常識的で合理的な判断により論証が成立している。これには論理的な反論が困難なため、山根氏は発掘調査により法円坂から大型宮殿跡を検出するという実証的な考古学的成果で反論に替えた。

実はこの考古学者としての信念は、

若き日に見た上町台地出土の二枚の古瓦(重圈文丸瓦、蓮華文丸瓦)に支えられていた。この瓦は置塩章(おじおあきら)氏(陸軍技師)が発見したもので、その置塩氏の執念とも言える言葉が『難波の宮』冒頭に記されている。

“書かれた歴史が何だ、そんなものは昔から権力者がどのような書きかえができる。しかしこの瓦は、法円坂町の大地の数尺下層から出土してきた状態をこの眼でたしかに認めたのだ。これほど確かなものがあるか、いまさら商売替えも出来ないから、このまま七十の年までは建築家でとおし、そのあと考古学を勉強して、きつとこの瓦にものをいわせてみせる” 一八〇―一九頁

戦後、続けられた山根氏の執念の発掘により、法円坂からの鴟尾出土を皮切りに、ついに大型宮殿跡(聖武天皇の大極殿跡など)、その下層からは別の宮殿跡(後に孝徳天皇の長柄豊崎宮とされる前期難波宮)が出土し、難波宮が上町台地法円坂に存在していたとする定説が成立した。この圧倒的な考古学的実証により、文

献史学の論証による長柄豊崎説は影を潜めていく。しかし、「真の問題」はここから始まる。

#### 四、難波長柄豊碕宮、北区長柄説

難波長柄豊碕宮を大阪市北区の長柄豊崎とする喜田氏の見解は、『日本書紀』の史料事実と現存地名との対応に基づいており、大阪の他の場所に同様の地名が見当たらないことから、山根氏による難波宮跡発見までは最有力説であった。

喜田氏には、この他にも法隆寺再建論争や藤原宮長谷田土壇説など、『日本書紀』や諸史料に見える記事を根拠とした仮説提唱と論争があったことは著名だ(注③)。例えば、天智紀に法隆寺が全焼したと記されており、燃えてもいない法隆寺が火災で失われたなどと『日本書紀』に書く必要はないという文献史学の骨太な論証方法で、法隆寺再建説を喜田氏は唱えた。対して、仏教建築史学や仏像研究による実証的で強力な非再建説があつたが、火災の痕跡を持つ若草伽藍の出土により、喜田氏の再建説が定説となった。

しかし、それではなぜ現在の法隆寺が推古朝にふさわしい建築様式であり、仏像も飛鳥仏なのかという疑問は未解決のままであつた。しかも、

その後に五重塔の心柱伐採年が五九四年であることが年輪年代測定により判明し、再建説では説明が困難となった。後に米田良三氏により法隆寺移築説が発表され、この問題はようやく解決を見るに至つた(注④)。

同様の問題が難波宮所在地論争にも横たわっている。孝徳紀に見える孝徳天皇の宮殿名「難波長柄豊碕宮」を史料根拠として、それが現存地名の「長柄」「豊崎」(大阪市北区)と対応し、その地の方が狭隘な上町台地よりも広く、王都王宮の地に相応しいという、常識的で合理的な長柄豊崎説だったが、山根氏の発掘調査により、難波宮が上町台地法円坂(大阪市中央区)に存在していたことが明らかとなった。しかし、それではなぜ『日本書紀』に記された「長柄豊碕宮」という名称が法円坂ではなく、他の場所(北区)に遺存するのかという問題が取り残されたままだ。すなわち、解決すべき「真の問題」とはこのことである。

#### 五、前期難波宮は長柄豊碕宮か

喜田氏の見解は『日本書紀』の史料事実と現存地名との対応という文献史学の論証に基づいており、他方、山根氏の上町台地法円坂説は考古学的出土事実により実証されている。な

ぜ、このように論証と実証の結果が異なつたのか。ここに、近畿天皇家一元史観では解き難い問題の本質と矛盾があるのだが、その理由は明白だ。『列島内最大規模の宮殿であるからには、列島の最高権力者である近畿天皇家の宮殿のはず』という、一元史観の歴史認識(岩盤規制)に従わざるを得ないからだ。

結論から言えば、山根氏が発見した前期難波宮は孝徳紀に書かれた「難波長柄豊碕宮」ではなく、九州王朝の王宮(難波宮)だった。その証拠の一つとして、法円坂から出土した聖武天皇の宮殿とされた後期難波宮は、『続日本紀』では一貫して「難波宮」と表記されており、「難波長柄豊碕宮」とはされていない。この史料事実は、法円坂の地は「難波長柄豊碕」という地名ではなかったことを示唆する(注⑤)。

この結論が妥当であれば、孝徳天皇の「難波長柄豊碕宮」は、九州王朝の難波宮(前期難波宮)で執行された賀正礼に参加し、その日の内に帰還できる近傍にあつたはずだ(注⑥)。その「難波長柄豊碕宮」の最有力候補地こそ、大阪市北区の豊崎・長柄エリアではあるまいか。そうであれば、喜田氏が論証した長柄説と山根氏が実証した法円坂説は相並び立つことができる。残された「真の問題」、孝徳天

皇の「難波長柄豊碕宮」が北区長柄にあつたことを立証したい。「令和六年(二〇二四)十二月五日、改稿筆了」

#### (注)

①「難波宮発掘調査六〇周年記念特別展 大阪遺産難波宮 ―遺跡を読み解くキーワード―」大阪歴史博物館、二〇一四年。

②信州白樺湖畔の昭和薬科大学諏訪校舎で開催された「古代史討論シンポジウム『邪馬台国』徹底論争―邪馬壹国問題を起点として―」(一九九一年八月一日～六日、東方史学会主催)のこと。

青森県五所川原市の和田家天井裏に残された文書を取り出し、保管するための費用が必要となり、「古田史学の会」では寄附を検討していた。和田家側の事情により実現に至らなかった。

③古賀達也「洛中洛外日記」三〇九七～三一〇六話(2023/08/22～09/07)「喜田貞吉の批判精神と学問の方法(1)～(7)」

④現法隆寺は飛鳥時代の古い寺院が移築されたものとする説を古田学派の研究者、米田良三氏が発表している。

米田良三「法隆寺は移築された」新泉社、一九九一年。

⑤古賀達也「洛中洛外日記」一四一八

話(2017/06/09)『前期難波宮は「難波宮」と呼ばれていた』

同「洛中洛外日記」一四二一話(2017/06/13)『前期難波宮の難波宮説と味経宮説』

同「白雉改元の宮殿 ―「賀正礼」の史料批判―」『古田史学会報』一一六号、二〇一三年。『古代に真実を求めて』(一七集、二〇一四年)に再録。

⑥『日本書紀』白雉元年(六五〇)と三年(六五二)の正月条に次の記事が見える。

「白雉元年の春正月の辛丑の朔に、車駕、味経宮に幸して、賀正礼を觀る。(中略)是の日に、車駕宮に還りたまふ。」

「三年の春正月の己未の朔に、元日礼おわりて、車駕、大郡宮に幸す。」

## 古田武彦記念古代史セミナー 2024報告

日野市 橘高修(文責)

「古田武彦記念古代史セミナー2024」は11月9日(土)、10日(日)の2日間にわたって大学セミナーハウス(八王子市)講堂で行われた。以下、文責者の判断による抄録(です・ます調)と要略(である調)。

【荻上紘一大学セミナーハウス理事  
長兼当セミナー実行委員長挨拶】

古代史学においては「史実」の解明が基本であり、そのためには史実を論理的、客観的、科学的に「証明」する必要があります。当然のことながら evidence-based でなければなりません。

「史実」には、「When」「Where」「Who」「What」「Why」「How」などの要素が含まれますが、最初の4つは客観的情報ですので、論理的、科学的かつ十分な説得力を持つ証明によつて確立されなければなりません。屢々「歴史観」「史実」に先行する議論が行なわれていますが、決して歴史観が先行してはいけません。このセミナーではその姿勢を貫きたいと考えています。

【中村修也氏「唐の羈縻政策と白村江の戦い後の日本」】

〈自己紹介〉

私は筑波大学出身の65歳です。もう年なので家内から髪を染めるように言われますが、今日の参加者は高齢の方が多いので染めてこなくてよかったです。

〈歴史観〉

歴史に関していえば、史書を書いた人は史実には立ち会っていません。したがって史書の内容が史実とは言えないということです。本を書いた

時は、7世紀の東アジアについて私以上に理解している人はだれもいないと思っています。白村江の戦いについて言えば、唐が高句麗を滅ぼす過程で起こった戦いであるという視点で考えることが大切と語った鬼頭清明先生(1939年生まれ、2001年没)は65歳くらいでなくなりましたが、この人ほど東大学派からはみ出た人はいませんでした。

〈7世紀の東アジア情勢〉

当時(7世紀)の東アジア情勢を考える時の問題の所在は以下の通りです。

- 1 唐の高句麗遠征
- 2 新羅の朝鮮統一
- 3 白村江の敗戦
- 4 唐の羈縻政策に関する日本史研究者の無視
- 5 朝鮮式山城の作成者は誰か
- 6 就利山の会盟の意味
- 7 郭務棕の働き
- 8 新羅の対唐戦の勝利が日本への占領政策を阻んだ。

中国王朝が漢民族というのは全くの嘘で隋以降は北方民族です。隋は常に高句麗と戦時状況にあり、唐も同じく高句麗に遠征したが倒すことはできませんでした。

高句麗は唐との戦闘を有利に運ぶために百済と同盟を結んで南方の安全を確保したかった。

百済は高句麗と同盟を結んでいる間に新羅を併呑したかった。

新羅は女王が続き兵力的にも百済を排することができなかった。

唐は、高句麗↓新羅↓百済の順に征服して朝鮮半島を制圧しようと考えていました。

高句麗は北から、百済は南から新羅を攻撃したので新羅は唐に救済を求めました。女王を補佐する王族の金春秋(603年〜661年、後の武烈王)は危機に陥った新羅を救うために高句麗、日本、唐に向いていました。ものすごく外交手腕にたけた人だったようです。唐は新羅を援助することによつて朝鮮半島を支配しようとしています。649年、新羅は唐の衣服制を導入して服従の姿勢を見せます。その間の金春秋の動きは、642年高句麗に使者として訪問(対百済戦のため高句麗を味方に付けようとした)、647年日本を訪問(百済攻撃に対して理解を求めた。孝徳朝は親百済路線から親唐路線に方針を変えていた)、648年唐に行き百済出兵を依頼するというものでした。金春秋は唐の軍事力によつて百済を排除し半島南部に勢力を伸張し唐との同盟国というポジションを確保して高句麗戦に臨み、高句麗滅亡後に唐の矛先が新羅に向いた時にも(新羅の)戦力をそがずに保持する



ことができるようにすることが金春秋の目論見だったのです。

### 〈白村江の戦い〉

そのような情勢の中で白村江の戦いは行われました。朝鮮半島の西海岸は海底が泥状になっていて船行がむずかしい、斉明朝は軍制を布いていないので派遣したのは一般人だった、そのような状況で斉明軍は白村江に到着するとすぐに唐軍に攻撃されてほぼ全滅させられました。

### 〈唐の羈縻支配と近江朝廷〉

倭国では日本書紀に「筑紫都督府」と記されているように、唐による羈縻支配が行われました。日本書紀は羈縻支配の残像を消し去ろうとしたようですが、現在残っている写本は室町時代作成のもので「筑紫都督府」は消し忘れたものと思われる。

近江朝廷について、飛鳥に唐軍が駐留していたため天智はやむを得ずに交通の便が悪い大津宮を造ったものと思われる。天智朝の組閣が天智十年正月十三日条に記されていますが、百済人が多く高官に任命されています。唐軍の命令によるものでしょう。

### 【大墨伸明氏「古田武彦記念古代史セミナー2024」がめざすもの】

大墨伸明氏は今後の当セミナーの

在り方に対して、古田武彦氏の「学問の方法」を今一度想起するために、次の4点の課題を挙げた。

「古田説に立つ」だけでいいか

「古田説」の検証という視点

外部に向けた発信力

わかりやすく説くこと

最後に大墨氏は『「邪馬台国」はなかった』序章に記された「わたしの方法」を読みなおして今後の研究活動の指針にすることを参加者に呼び掛けた。

### 【谷川清隆氏基調講演 「日本書紀」巻分類の深化 ―倭国から日本国へ―

天文学者の谷川清隆氏は、『日本書紀』の中の天文観測記事に注目し、天文観測記事が記載されている巻とさされていない巻があることに気づき分類を始めた。谷川氏は『日本書紀』を「天群」「地群」「泰群」に分類した。その結果は、森博達氏が1999年に『日本書紀の謎を解く』で著わした「α群」「β群」分類とかなり類似していた。それが20年ほど前のことであるという。

谷川氏はその後、『日本書紀』の七世紀の記事の中で、「屋久島との交流の有無」、「隋・唐への遣使の有無」によって分類を行い上記の分類と一致していることを確認している。

今回は推古朝以降に数回制定された「冠位」が上記の分類と適合していることの論証を試みた。

### 【新庄宗昭氏「唐進駐軍の羈縻支配はいつまで続いたか ―問題提起として―」

新庄氏は著書『実在した倭京』（ミネルヴァ書房、2021年）で、発掘された藤原京の先行条坊について、壬申の乱で勝利した大海人皇子がまず詣でたのは大海人皇子よりも上位者の所在地である「倭京」だったことを主張した。新庄氏は今回の当セミナーの特別講師である中村修也氏の

「白村江の戦い後に唐の進駐軍が大和まで来て羈縻支配を行った」という主張に共感し、大海人皇子が詣でた上位者は羈縻支配を行う唐の進駐軍だったという結論を得た。壬申の乱の反乱の主体は唐の羈縻支配に反対する大友皇子であり、乱を制圧した後の天武朝は羈縻支配の中だったとの新説を披露した。今回は白村江の敗戦から羈縻支配の終了までを論じている。

### 【阿部周一氏「7世紀から8世紀の列島における倭国から日本国への転換の詳細」

遣隋使が倭から「日出処」＝日本の国号変更を隋皇帝に申し入れたが拒

否された。裴世清がもたらした国書に「倭皇」とあるので、この時に天皇号の使用は認められたと思われる。

白雉五年の遣唐使段階で倭国から日本国への国体の変更が行われた。大化元年七月条「明神御宇日本天皇」、大化二年二月「明神御宇日本倭根子天皇」、この頃、日本号が初めて使われている。

半島との戦いでは、倭軍は高句麗を救済し、日本軍は百済を救済して新羅を攻撃している。

「日本旧小国併倭地」は、首都が「筑紫」から「難波」の地へ移動したとみられる。形式上倭国は消滅か。

白雉四年孝德天皇の「天皇、恨欲捨於國位」は皇太子によるクーデター、これをきっかけに日本国を自称するようになったか。

壬申の乱は唐の援助による倭国王権再興の戦い。「薩夜馬」と「大海人」の類似が強く疑われる。

### 【大墨伸明氏「天智紀の郭務倭外交の舞台筑紫とその意味するもの」

大墨氏は、史料事実を積み上げていくと諸史料の記述はつながっている、と前置きして発表を始めた。

大墨氏は、『旧唐書』日本国伝に「日本国は倭国の別種」と記されているように、倭国と日本国が七世紀後半に併存し、倭国から日本国への権力

の交替が行われたことを示すいくつかの史料を提示した。

### 〈「日本国天皇」と「倭王」〉

菅原在良勘文」には、天智十年（671）「大唐帝敬問日本国天皇」と天武元年（672年）「大唐帝敬問倭王」の二つのあて名が記されている。郭務棕が最後の来訪時に二つのあて名の書簡を用意していたことになる、とする。

### 〈「筑紫都督府」と「筑紫大宰府」〉

天智六年（667）には「筑紫都督府」という唐の支配を受け入れた名前が出てくるが、天智十年（671）では「筑紫大宰府」となっており、唐の占領が終わっていることを示しているとしている。倭国が白村江の戦いに敗れて唐の占領を受け入れた。この時倭国は滅亡した。天智十年条の「筑紫大宰府」は日本国の一機関としての名前となっている。

### 【國枝浩氏「倭国と日本国 ―唐と新羅の史書から―」】

〈「旧・新唐書」の記述は信用できる〉  
國枝氏は『日本書紀』の記述は意図的に記されたものが多く信用できないが、『旧・新唐書』の倭国と日本国に関する記述は『日本書紀』に比べて信用することができるとする。

氏は『旧・新唐書』の日本(国)伝に記された遣唐使の証言に注目して

いる。

### 〈「旧・新唐書」の編者は当初日本からの遣使の発言を疑っていた〉

『新唐書』日本伝の記述から、日本Ⅱヤマト王権の対中国国交の開始は咸亨元年として、それまではヤマト王権からの遣唐使はなかったとする。『旧・新唐書』日本(国)伝の記述から、唐は日本からの遣唐使の発言を疑っていて、日本国の実態が把握できていなかったと述べている。  
唐にとつて九州倭国は既知の存在だったが、矛盾する発言を繰り返す日本国についてはなかなか理解できなかった。

### 〈唐側の倭国と日本国に対する理解は〉

旧唐書に記されているように唐は倭国と日本国は「別種・別国」であると理解していたが、後に粟田真人らによつて倭国と日本国は同種・同国であることが伝えられた。

### 〈『唐書』の学習会の提案〉

最後に國枝氏はセミナー参加者に対して『唐書』の学習会を立ち上げることを呼びかけて結びとした。

### 【黒澤正延氏 「倭国」から「日本国」へ最初の論点】

#### 〈「日本」の読み方の推移〉

昨年のセミナーで川端俊一郎先生が「日本」が「ニホン」と読まれるの

はずいぶん遅くなつてからと話していた。

「日本」を「ヤマト」と読ませた日本書紀。

「日本」を「ニホン」と読ませたのは「大日本帝国憲法」

『旧唐書』には、遣唐使が「倭を嫌つて日本(ヒノモト)にしたと記す。

倭人が構成したのが倭国で、天武天皇が「倭」を「ヤマト」と読ませた。

天智天皇の日本を天武天皇は継承しなかった。

斉明天皇崩御後、天武天皇は「日本」を「ヤマト」と読ませた。

〈国号としての「倭国」と「日本国」〉  
「倭国」は倭人が作る国を総称して中国側が付けた名前。

倭奴國は倭国内の一国を代表国とした。  
倭奴国Ⅱ倭国と日本国は併合関係にあり、別種だった。

〈中央集権国家を目ざした天武天皇〉  
天武天皇はなぜ「日本」を「ヤマト」と読ませたか。

斉明天皇が崩御して九州王朝が滅亡した後、中大兄皇子が唐の矢面に立っていた。  
天智天皇の死後、大友皇子と九州王朝勢のトップである大海人皇子が壬申の乱で戦い、大海人皇子が勝利した。

678年に斉明天皇が崩御した後、天武天皇は、天武天皇の勢力と天智天皇の勢力と旧九州王朝の勢力を集めて「吉野の盟約」を結び、天武は斉明が称していた天皇号を承継した。(天皇木簡が飛鳥から発見されている。)

天武天皇は新都を造り、国史を編纂し、律令を制定することにより、中央集権国家を作つて多利思北孤路線を継承しようとした。

### 【パネルディスカッション】

「古田武彦記念古代史セミナー2024」の最後はパネルディスカッションが行われた。

今年のセミナーのテーマである「倭国から日本国へ」は、古田武彦氏が『失われた九州王朝』で発表した九州王朝説の帰着点である「ONラインⅡ701」につながるテーマである。古田氏は郡評論争の結果などをふまえて、倭国と日本国の境目を701年と証明したが、ONラインに至る過程、7世紀後半に起こったと考えられる出来事の解釈についてはについては明快な結論を得たとは言えず、我々に研究の余地を残してくれた。古田氏が残してくれた宿題の解答に少しでも近づけるように活発な議論を行うことを目的としてパネルディスカッションを行った。

## 〈パネリスト〉

今回のセミナーで講演をした特別講師中村修也氏、基調講演の谷川清隆氏をはじめ講演者全員(計7名)がパネリストとして登場した。

〈古田氏の考え方…ビデオ上映〉(映写時間 約15分間)

〈パネリストによる2分間スピーチ〉(約15分)

〈パネリスト同士の質疑応答〉(約30分)

〈セミナー参加者からの質問に対する質疑応答〉(約55分)

## 〈中村修也氏からの講評〉(約5分)

七世紀の短い期間を対象にしてこれだけ集中して議論を行うことはすごいと思います。倭の五王は九州勢力だと考えていますが、『日本書紀』をどう読むかが課題です。九州と大和の二大勢力だけではなく、四国、出雲、越などにも勢力が存在したと思います。九州王朝については磐井の乱をどう解釈するかが課題だと思います。

2日間セミナーに参加したことで私も九州王朝論が正しいのではないかと傾きそうになりました。

## 【荻上紘一実行委員長の講評】

### 〈中村修也先生は反骨の学者〉

今年のセミナーに特別講演の講師

としてお招きした中村修也先生は最初から最後までフルに参加してくださいました。中村先生は古代史学者としては決して主流派とは言えませんが、文系の学者は上司である先生に逆らったら生きていけません。理系では自分の先生を超えていかなければなりません。中村先生は先輩の言うことを聞かなかったにもかかわらずここまで実績を上げてきました。

### 〈基礎から積み上げる研究姿勢〉

参加されている谷川清隆先生が歴史的事実を確認するときに、「二次、三次と研究を深めていくが、(歴史研究においては)」現在は0次の研究をしている。」とおっしゃっていました。0次の研究は基礎的な研究がきちんとできなければならぬということ、現在はわかりやすい指標を使って『日本書紀』の構造を調べていらいつしやいます。

研究は自分だけにしかわからないのでは意味がありません。谷川先生のような姿勢で誰にでも理解できるように研究を続けていただきたいと思っています。

### 〈「歴史教科書を変える力になりたい」〉

昨年からのセミナーでもパネルディスカッションを行っています。徐々にやり方がうまくなってきたようです。仲間内でワイワイやってい

ても意味がありません。これから真剣な討議が求められます。

このセミナーは次年度からも実行委員会方式で準備してより質の高いセミナーを実施することによって、将来的には「日本の歴史教科書を変える力になりたい」と考えています。皆様のご協力をお願いいたします。

※「古田武彦記念古代史セミナー2025」は2025年11月8日(土)、9日(日)に開催の予定。

富雄丸山古墳の被葬者は宮崎から嫁いだ者で、蛇行剣は贈答品か

吉川市 堀口啓一

### 一 被葬者は女性らしい

富雄丸山古墳が発見され、その後出土物が一般公開されるに及び大きな話題となった。富雄丸山古墳自体は大きな円墳らしく、この古墳からは櫛や鏡が出土しているとの事で、被葬者は女性らしいと報道されている。

### 二 摩訶不思議な長い蛇行剣

この古墳からはとても長い蛇行剣も出土したと言う。外見は非常に奇

異な印象を与えるが、実戦では役に立ちにくい形状に見える。実戦で使われているのであれば刃こぼれの痕跡が見付かる筈なので、恐らくは人を斬ってはならず、鍛造しただけなのであろう。

### 三 宮崎県から輿入れた者か

蛇行剣は宮崎県を中心に鍛造されていた剣である事が分かっている。円墳ならば日本各地にあり、宮崎県にも多少はあるようだ。

被葬者であるが、私は婚姻により宮崎県から来た女性であろうと考えているが、あるいはその親族と言う可能性もある。

『日本書紀』には日向国から来た髪長媛の記述(注)があるが、同様の事が他にも行われていて、蛇行剣は実家の宮崎県で造られて輿入れ元から婚家に贈られた贈答品もしくは進物品なのかも知れない。

### (注)

舍人親王等撰『日本書紀』卷第十 譽田天皇 應神天皇および卷第十一 大鷦鷯天皇 仁德天皇。

# 古代史エッセー83 日本国号と禰軍墓誌

日野市 橘高 修

## 『旧唐書』日本国伝の論点

〈倭国と日本国は別国か〉

『旧唐書』日本国伝には、

「日本国者倭国之別種也」

と明記されており、倭国≡日本国とされる通念とは正反対の表現となっている。これをどう整理するか、がまず論点となる。

## 〈国号変更の問題〉

次に、国号変更の問題である。

「以其国在日辺故以日本為名」

「倭国自惡其名不雅改為日本」

とあり、国が太陽（が昇るところ）の辺りにあるから日本を国名にした、という説と、倭国の人がその名前が雅でないことを嫌って日本とした、という二つの説を併記している。どちらも遣唐使の発言による。

## 〈政權交代の問題〉

もう一つは、倭国から日本国への政權の移行の問題。

「日本旧小国併倭国之地」

もともと小国だった日本が倭国を併合したと記す。これも使者の証言。

〈唐は使者の発言を信用しなかった

ただしこの後に、

「其人入朝者多自矜大不以実対故中国疑焉」

とあり、唐側は日本国の遣唐使の発言をこの段階では信用していない。

中国側が信用したかどうかはともかく、日本国を称する国から遣唐使が訪れて日本と改名したいきさつを述べたことが記されている。

## 【論点の整理】

『旧唐書』日本国伝の冒頭の文章

の中に三つの論点が記されている。

・倭国と日本国は別の国として存在したかどうか。

・日本国が太陽（が昇るところ）の辺りにあるので日本を自称したのか、倭国が倭国という名前を嫌って日本に改称したのか。

・日本国が倭国を併合したという事実があつたかどうか。

この記事がいつ頃のことかは記されていないが、七世紀後半のことと考えて大過ないだろう。

## 【禰軍墓誌の発見】

七世紀後半に「日本国」の名称が唐王朝内で通用していたかどうかを考える時に禰軍墓誌は避けては通れない金石文である。

## 『日本書紀』に登場する禰軍

（613年生 - 678年2月16日没）は百済生まれの唐の官僚。唐・新羅軍が百済を滅ぼした戦いで唐に捕えられ、その後唐の官僚となり百済遺民の反乱を慰撫するために旧百済の熊津都督府に派遣された。唐の官僚として67

8年に死没している。

天智紀三年九月二十三日条の注に

「右戎衛郎將上柱國百濟禰軍」として

「朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高、

「朝散大夫柱國郭務悰」らと共に来朝したことが記載されている。

2011年に中国の西安市の個人

コレクションの中から墓誌の拓本が発見された。「大唐故右威衛將軍上柱

國祿公墓誌銘并序」という18文字

をはじめとする合計884文字の銘

文である。その中に、

「於時日本飴礁拋扶桑以遁諒風谷遺

虵負盤桃市阻固（660年、唐軍が百

済を平定した時に、「日本」の餘嘯は

扶桑に抛りて以て註を遁れ、風谷の

遺虵は盤桃を負いて阻固す）」

とある。中国国内の現存史料において「日本」が記された史料の初出。

墓誌のこの部分は難解である。前後の文脈や漢文の構成などを正確に把握しないと「日本」が何を意味しているかは判断できない。ここでは文章に対する理解が浅いことを前提にして見通しを述べてみようと思う。

【東方の場所を意味する「日本」】

禰軍墓誌は発見当初から、7世紀後半（墓誌作成は儀鳳三年（678））に「日本」が国名として唐内で通用していた確かな根拠になると主張された。しかし墓誌の文章を精査すると、墓誌に記された「日本」を、日本国の

ことと理解する説（鈴木靖民氏等）、

唐の東方の場所を表しているとする

説（東野治之氏等）、あるいは墓誌の

当該箇所を「於時日、本余嘯」と区切

り方を変えて解釈する説（石田泉城

氏等）など、諸説が主張され、墓誌に

記された「日本」が、日本国を意味し

ているのか、日が上がる場所≡唐の

東方にある場所を意味しているのか、

意見がわかれている。

【日本国号は、七世紀の唐では通用し

ていなかった】

ここで重要なことは、墓誌に記さ

れた「日本」が日本国以外を意味して

いるとするならば、日本国という国

名は当時の唐では認識されていなかったということ。日本国という国名

が存在しているにもかかわらず、墓

誌に異なる意味で「日本」を使用する

ことはありえないからである。被葬

者の禰軍は唐の高級官僚として没し、

埋葬されたのだからなおさらであろ

う。墓誌は唐朝の公式文書として記

されているのである。また墓誌の「日

本」が日本国を指しているのだとす

ると、旧唐書も三國史記も白江の戦

いで「倭」軍と戦ったと記述されてい

ることと整合性がとれないのである。

百済滅亡の時点で、旧唐書に「日本」

ではなく「倭国」が使用されているこ

とは墓誌の「日本」解釈において無視

することはできない。



## 「東日流の旅」に参加して

仙台市 広幡 文

東京古田会主催十一月二十七日（二十九日）の「東日流の旅」に参加させていただきました。以前東京古田会の「記紀歌謡研究会」（二〇一七〜一九）に参加し、そこで知り合った方の案内で参加できました。

縄文から中世・現代に至るまで（初日）

初日の二十七日は、青森空港で待ち合わせ。東京の皆さんが来るまでに昼食をと、リンゴカレーとしじみラーメンを注文。さっそく青森の味を満喫。バスに乗り込むと、関東から十一名、松山一名、札幌一名、仙台二名、地元五名の総勢二十名の参加。語部は地元の玉川宏さんと、自己紹介をしながら行った先が、縄文前期から中期に花開いた森田町石神遺跡。狄（えぞ）ヶ館ため池で半島のように突き出た場所が石神遺跡で、時雨模様の晩秋の寂しい風景の中、ひっそりとたたずむ木柱に石神遺跡文字があり、ただそれだけしか見ることができないという、悲しい遺跡跡でした。でも三内丸山と亀ヶ岡遺跡を時の流れの中で結びつける重要な遺跡

だと、玉川さんは強調されました。

次は中世の物語を象徴する鯨ヶ沢町の天皇山と高倉神社。「壇ノ浦で入水した安徳天皇と宝剣を救った（掬った）安東水軍が、宝剣を東日流浮太刀に祀った」と和田家文書に記されるが、現在地名鯨ヶ沢町北浮田の高倉神社がこれに当たる」と玉川さんが解説。

高倉神社の境内は銀杏の落ち葉で黄色に染まり、滑りやすそうになっていました。神社の銅鑼を鳴らす綱に小さなたくさん鈴がついていて、銅鑼そのものよりさわやかな響きを伝えてくれました。

初日の最後は明治の様子を伝える深浦の円覚寺。深浦には安倍比羅夫が戦ったという謂われの地があり、また北前船の集まる大きな港町としても栄えた様子を円覚寺がたくさんの絵で紹介しています。船の安全祈願をする持衰の姿を絵にしているのは、日本でもここだけとのこと。

そして江戸時代安全航海できたことを祝って、この寺に多くの漁師が奉納したちよんまげも見ることができま。圧巻なのは日露戦争出兵の安全祈願のために作ったという毛髪刺繍。毛髪は出兵家族が協力したこと。また青森で一番古い木造建築が薬師如来堂として残っていました。

た。

私が一番心に残ったのは日露戦争の毛髪刺繍。日露戦争準備のための八甲田山演習で多くの命を失いましたが、それを映画化し高倉健が主演した「八甲田、死の彷徨」を思い出しました。

そして宿に向かいました。進路の右側が日本海。鉛色の空と白い荒波が冬の津軽のものすごさを語ってくれます。映画「砂の器」でも、この深浦海岸の冬の光景が使われていたことを思い出しました。

この日は黄金崎・不老不死温泉に一泊。温泉の色が深い赤色でびっくり。でもとてもあたたまるお湯でした。お料理も抜群。この日の夕食でも玉川さんが和田家文書のことをいろいろ解説してくれたので、ついつい私はずっと持ち続けている疑問を発してしまいました。「日本書紀の皇紀二六〇〇年すら信じられないのに、どうしてそれ以上の古い時代のことを信じられるのですか」と。玉川さんは「私も信じていなかった。日本書紀は天皇の寿命を百年以上と記録するからダメだが、和田家文書では百歳以上の天皇は一人も存在しない。その間は空位という扱いをしている」と回答。そう言われて私はひらめきました。「日本書紀や和田家文書を書

いた人たちに共通する年代観があり、それを根拠として文書を記載する。日本書紀は空位を書けないから、天皇の命を長くせざるを得なかった。とすれば、共通する年代観を持たせたバックがあるはず。それが北九州倭国かもしれない」と。私はやと和田家文書の入り口に立てたようです。

## 古十三湖を一周（二日目）

この日は山登りから始まりました。深浦・追良瀬川沿いの見入山観音の



金ヶ沢 大いちょう

見学です。山形の山寺よりもきつくて狭い登山道ですが、登りきった先に馬頭観音と千手観音を祀るほこらがありました。言い伝えでは平安時代からのもので、南北朝の時再建さ

れたと紹介されています。でも和田家文書に関係する場所ではなく、玉川さんが現役時代に自分で設計した橋を見せたくて、この観音堂に連れてきたのだと思ってしまいました。ただ、山の入り口でたくさんのおなの実を拾い、平地でぶなの実を拾ったことのない私は、青森がいに寒い地かと実感させられました。なお見入山観音から白神山地はすぐのこと。

次は北金ヶ沢の大銀杏。季節はびつたりで、真つ黄色の銀杏が迎えてくれました。昨日の高倉神社の銀杏は裸になっていたのに、北金ヶ沢の大銀杏の葉が落ちないのは、千年以上生き続けて幹回りを太くしたためではと考えました。でも私の連れ合いは「海からの直接の風があたらない場所だから」と反論。私はあっさり降参しました。大銀杏の前で、参加者全員の記念撮影。

北金ヶ沢の大銀杏の近くに、安東水軍が造ったという洞穴城があります。バスの中、中山仁出演のビデオ映像を見せてもらいました。

午後は亀ヶ岡遺跡を紹介する木造亀ヶ岡考古資料室の見学。有名な遮光器土偶が発見された亀ヶ岡遺跡。玉川さんが「あれは遮光器ではなく、

目を開けている時と閉じている時の両方の顔を描いたもの」と解説。また補足して「漆塗土器の出土もあり、八戸は川遺跡から青森三内丸山遺跡を経て亀ヶ岡に漆器が伝わったと考えられる。八戸は川からは二戸にも移り、現在の漆産業へと伝わっている。」「亀ヶ岡はもとカムイヶ丘」。縄文時代、壮大な文化交流があったようです。

資料館の周りは大溜池で、これも十三湖の名残と説明受けました。



JR 木造駅

次は北上して十四世紀の天津波で失われた元木造湊を見学。さらにその北側にある浜の明神も見学。浜の明神のある場所は十三湖が昔海に通じていた場所。今の海への出入り口

はもつと北側にあります。昔の河口は今の河口付近から南に向い、何キロか南下したあと海に流れ注ぎます。昔の河口の絵図が震災前の仙台市の蒲生干潟にそっくりだったので、この古地図は信頼できると自分で太鼓判を押しました。

次は有潤(うづみ)の浜。戦いが済んだあと、安倍比羅夫と宴会をした場所だそう、その話を聞いて、戦いはなかったと勝手に思い込みました。阿弓流為も闘いはせず仲良く付き合っている、都を見せようと言われて都に連れられていき、そこで首をはねられたのが真実。権力者側の記録は信じてはいけません。

午後四時近く、曇り空であたりはうす暗くなりかけましたが、本日最後の見学地安倍神社を参拝。玉川さんの説明で、長髓彦の骨を最終的に葬った場所とのこと。中腹のほこらで女性二人が石に彫った漢字を熱心に読んでいました。「奉斎月夜見命」とありました。

月夜見命と長髓彦を一緒に祀るとはすごい。これは本物だ。そう興奮して、手のひらが熱くなりました。理由を説明するのに三ページ分くらい必要なもので、後の機会に説明したいと思います。

もう一つ、この場が十四世紀の安

東氏の本拠地福島城のすぐ近くにあるという事実にも興奮させられました。先祖の墓があるということは、墓守がいたということ、ずっと仲間が暮らしていた地域なのです。これも真実としか思えなくなりました。ますます明日が楽しみ。そんな気分、五所川原の宿に向かいました。この日もおいしいお酒をいただき、和田家文書の議論に楽しく耳を傾けました。

### 卑弥呼ゆかりの地五畿形(三日目)

最終日は天候不順、晴れたり雨降ったり雪降ったりが繰り返され、冬間近の津軽の厳しさを知らされました。この日は沼に沈む砂沢遺跡が最初の見学地。ここは二千四百年前の水田跡地が発掘された場所。田舎館より三百年早い水稲耕作地です。日本でこれに並ぶ古い水稲耕作地は福岡県の板付遺跡。さらに古いのが菜畑遺跡。だから青森は日本で二番目に水稲耕作が始まった地。玉川さんの解説では「和田家文書では、中国の黄河から青森に直接伝わってきた」とのこと。

次は巨石の男神・女神で有名な山風森へ。ここはまさに藪ごぎの道。藪ごぎは岩魚捕りで毎年地元仙台で経



験してありますが、旅行先での体験は初めて。でも何度も来られている方々が案内人なので、安心してついていきました。

そしてこの日の中心テーマ、九州から卑弥呼が黄幢(やまい)によってさまよいつづけて東日流にやってきた土地、五角形の地Ⅱ五畿形の見学。ここは五畿形を発見された竹田侑子さんの案内。まず和田家文書にある「卑弥呼の降神大法」に記される「三角二つ」の底辺をなす(同緯度に位置する)二つの愛宕神社を見学。最初の宮本愛宕神社にはハルニレの大きな木があり、やっぱり青森は寒いと実感させられました。二つ目の日新愛宕神社も宮本と同じ地蔵堂で、ご神体が霊石。

そして三角形のてっぺんをなす「沢田森」へ。沢田森は和田家文書では「板之木邑の沢田盛」と記され、字の通り、森ではなく小さな古墳。和田家文書では沢田盛は「アラハバキ王安日彦王の墳墓で、遺骨は仁徳時代長髓彦王の遺骨とともに市浦邑に移葬された」と記されているそうです。

要するに、三か所のアラハバキ信仰地を三角形で結び、もう一つの三角形を対称(シンメトリ)に引くと、現在の五畿形地名の場所に「五角形」ができるというのが竹田侑子さんの

説でした。雨や雪に降られながらも、紀元前・紀元後の世界をさまようのはとても貴重な体験でした。歩く道の片側を流れる小川にたくさんさんのリンドの実が浮いていて、どれもおいしそうだったのに拾うことができずとても残念。

この日の見学の最後は、田舎館村埋蔵文化財センターで、垂柳遺跡(二千年前の水田跡地)を見学しました。この水田跡地は昭和六十年頃見学に来ていて、センター職員の解説には興味が持てなかったのですが、壁に貼られた展示品(写真や解説図など)をじっくり見学しました。



高樋遺跡 弥生時代の水田跡

その中で二つの展示に目がいきました。まず東アジアの水稲耕作地帯の地図。揚子江下流の河姆渡遺跡が

七千年前、黄河流域は四千年から三千五百年前。そして韓半島が二千八百年前後で、菜畑遺跡とほぼ似た時代。だから矢印が「河姆渡→黄河→韓半島→菜畑遺跡→板付遺跡」と記されていますが、青森の砂沢遺跡や垂柳遺跡には矢印がありません。黄河から直接青森へ渡ったと記録する和田家文書、河姆渡の温暖系の水稲ではなく、黄河の寒冷地仕様の水稲が渡ってきたと考えると、青森で早期の水稲跡地が発見されるのは自然なことと理解でき、またまた和田家文書の正しさが証明されたような気分になりました。ただ玉川さんは「江戸時代に砂沢や垂柳地区で古い時代に農耕文化があったことを示す農機具などが見つかっていたから、こういう予測めいた文書が書けたのでは」と解説してくれました。

もう一つ見てよかったのが、砂沢遺跡の発掘直後の写真。今朝雨にけぶる沼を見ただけだったので、写真で地上に現れた砂沢遺跡を見ることができ、とても幸運でした。

青森の皆さんとはこの垂柳遺跡で別れ、飛行場で関東方面の方々とも別れ、もう一泊される女性四人組と一緒にバスで青森駅に向かいました。来年もう一度「東日流の旅(石塔山)」

を計画してくれるとのこと、また参加させてもらいたいと思っています。

## 花の女子旅雪中行軍(四人旅)

寄居町 山田まゆみ

まずは空港からバスで青森駅へ。青い森鉄道、乙供(おとも)駅まで一時間。下車後、可愛い女子高生に道を聞き、真暗闇の中、東北温泉に無事到着。黒い温泉で温まった。

## 日本中央の碑(つぼのいしづみ)

翌朝は雪、それも本降り。でも予定通り、タクシーでまず石碑の発見場所へ。呆れ顔の運転手さんを尻目に落葉に雪の降り積もる階段をそっと下る。少し平場になった所に発見時の説明板。更に階段を下った先の赤川近くの湿地が発見場所。標が建っていたが危険なので上から見る。雪の降りしきる中、とても納得のできる場所であった。車で少し走り、真新しい保存館へ。五センチ程雪の積もった駐車場から新雪を踏みこめ。何とあつけらかんと「日本中央」の四文字のみの石碑がケースの中に鎮座。伝説では坂上田村麻呂が彫ったとい

うが、田村麻呂は現在の水沢付近までしか来なかった。本来の建立者であろう、日本将軍である安倍の名も年月日も全て削られていた。平安時代から多くの歌に詠まれてきたというが、ガラスケースの中からは何も感じ取れなかった。

# 千曳（ちびき）神社

（祭神 賽の神・八衢彦神・八衢姫神）

保存館からほど近く、集落から少しはずれた林の中に千曳神社はあった。鬼と碑を関連づけた伝説があるが、保存館でもらった資料の中に次のようなことが書いてあった。

北巡行の際、その命を受けて石碑を探索させ、社殿の下を発掘させたといい記録が残っている。”

白木の鳥居の先に、青森ヒバの美しい長い参道が見渡せる。足元を気にしながら奥へと進むと、左に直角に曲がった先にお社があった。少し朽ちている。（境内の二つの小社も床が抜け落ち空っぽ）そつと戸を引くと、なんと三巴紋の幕。奉納絵馬にはいくつもの蛇神が描かれている。これは曲がり参道ではないか？（陰陽道の封霊四法の一つ）蛇神は祟り神として恐れられ、封じ込められたのでは。運転手さんも「蛇が祀られているらしい」と話していたが、まさに絵馬が教えてくれた。常陸国風土記の夜刀の神のように、水田開発により追い払われたのでは？

千曳神社の「ち」はおろち（大蛇）、みずち（蛟）の「ち」ではないかと想像は膨らむ。調べてみると、県南最古の神社であり、往時は参詣者で賑わったそうだ。運転手さんによると、「今はすっかり寂れ、集落の人も少なくなり、祭りもできなくなりました。せめてもと、節々の日に寄り集い飲食を共にする。」とのこと。

千曳駅は人里から離れて雪景色の中。運転手さん、ホームまでの下り坂

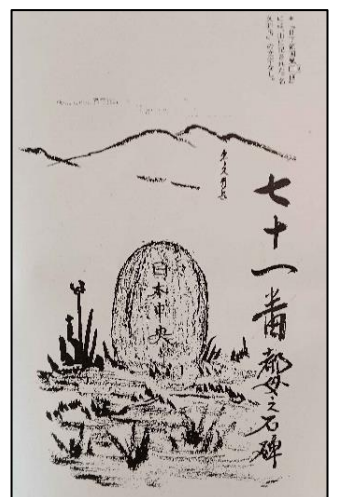
を案じ、傘をさしかけて送ってくれた。電車で千曳から八戸まで四十分。

## 是川縄文館

この遺跡の発掘、保存には地元の有志・泉山兄弟の尽力があつてこそとボランティアガイドさん力説。

漆の美のコーナーでは、赤（ベンガラ）黒（煤）で色付けされ、保存状態のよい出土品の数々。常設展示品の八割が重要文化財というだけあり、夢中で見入ってしまった。そして、最後の国宝展示室に「合掌土偶」。男女両性を合わせ持っているように見えた。折損部にはアスファルトで補修された跡があり、丁寧に使われていたようだ。頭頂部に簪を挿していたであろう穴、首には二重のネックレス、衣服の立体的表現。目を見開き何か一心に祈っているような姿はとても力強い。同寸大のレプリカを持つてみると、見た目以上にずっしりと重みを感じた。（千二百グラム）

八戸駅行バスの待ち時間に「これカフェ」で一休み。名物せんべい汁、コーヒートークも頂き、疲れが取れた。中身の濃い楽しい旅だった。



（第七十一番 都母之石碑）

## 和田家文書備忘録 10 弘前市相馬の長慶天皇陵 港区 安彦克己

晩秋から冬に移りゆく津軽の地を巡ってきた。目的地は弘前市相馬にある長慶天皇御陵。案内を「秋田孝季集史研究会」の玉川宏氏と増田達夫氏にお願いし、同行者は皆川恵子氏。

私が『和田家文書』を読み始めた頃、五所川原市の五所は、弘前市の奥地相馬に在った長慶天皇の御所が岩木川の大洪水により流され、流れ着いた場所にその名を憚って五所川原と名付けられたと知り、驚いたことを覚えていた。弘前の奥地に天皇の御所があったのだろうか。いつか相馬に行ってみたいと温めていた。

平凡社『青森県地名辞典』では五所川原の地名は地域の文書『平山日記』



を引いて

「寛文年間に岩木川が屈曲し、五カ所に川原があったため村名となった」

としている。この説明では「御門の御所」とは全く関連性が見いだせない。

『東方年表』によれば、長慶天皇は、南朝第三代の天皇で後村上天皇の皇子、名は寛成（ゆたなり）、一三六八年から一三八四年まで帝位にあり、ネットを引くと墳墓の地は「未詳」とある。

『東日流外三郡誌』（『和田家文書』の史料を見てみよう。（抄録した）

史料1 「寛成帝之御所八幡流ル」（注1）

「応永二十一年十月七日 大雨ニヨリ行来川大洪水ト成リヌ。鼻和郡ノ御所ヨリ寛成天皇ノ八幡宮奥院流サル。不可思議ナル哉。奥院壊レズ大原ノ東ニ流レテ留マル。以来此地ヲ御所河原ト称シタリ。亦下ノ御所トモ称サレ、此地ニ御所八幡宮ガ建立サレタルモ、御所ト名称セルハ恐レ多シトシテ五所ト称セラルニ至ル。五所川原邑トハ是ニヨリテ称誕セリ。享保二年 飯詰組代官青沼」

ネットのブログには、江戸期に三度（明暦、寛文、貞享）の大洪水によって、「五所神社にあった長慶天皇のご神体と伝えられる祠が流された」



長慶天皇御陵墓

とある。この説明は疑問だ。長慶天皇が退位してから既に三世紀近くが過ぎた幕藩体制のもとで、御所を憚り五所と慮る時代はとうに終焉していると思う。

私はこの史料を読んだのであろう。相馬地区五所に立つと、山峡をぬけた作谷川と相馬川がこの地で落ち合、岩木川となった川はU字型（川袋）に曲流し、できた砂州の平地には現在、「弘前市相馬地区五所支所」が建ち、棟続きに「御所温泉」、「五所の診療所」と連なっている。地形からも水害が起こりやすいと想像でき、ネーミングに今日でも躊躇いをもっている」と知れた。江戸期になつて長慶天皇を祀った五所神社は近くの小高い丘に移されて鎮まつていた。

長慶天皇の陵墓は、相馬地区紙漉沢の山頂にある。麓には長慶天皇を祭神とした上皇宮があり、御陵には三十分ほどの山道を登り「御陵参考

地」として整備されていた。東方に目をやると八甲田山の連峰が一望でき、主峰大岳には雪が映えていた。

御所であることを伝える『和田家文書』を挙げる。

史料2 「寛成帝御成之事」（抄録）（注2）

「東日流相馬御所上座敷御陵コソ寛成帝之御在所ニシテ、応永十二年八月十五日、崩御日子ナリ。日本諸国ニ御陵伝説アルモ、東日流蝦夷管領藤崎城主安東教季殿ノ式目録ニ記筆アリ」

続いて、「安東式目録」には「次ノ条能ク護ルベシ」として四条を挙げている。

「一に、御所近くで乗馬及び刃物は持つてはならぬ。一に、酒・米・野菜・木炭・毛皮・魚貝は毒審所へ届けよ。一に、御所柵辺に近寄るものは斬首の刑とする。一に、玉座近くに仕える者は二十四刻通夜警護すべき」としている。

この史料の記録者は安東教季。行を変えて、陸奥國司・南部守行が「是ノ如ク、長慶帝ノ東日流御臨幸ハ御事実也」と書き添えている。南部守行の添え書きがある『和田家文書』は珍しい。御所としての警護に配慮した式目が採集されていた。

### 史料3

陵墓の存在については、津軽為信の代に記された『石田家文書』の「起請文之意趣」に、文禄元年御検地として前田利家・浅野弾正が下向するにあたり、長慶天皇の御墳墓が明らかになれば、藩主の落ち度になることから境内地の名前を変え齋主も変えるよう、元和二年（津軽藩）奉行所高坂伝兵衛・打越城右衛門が発した文書が残ると『相馬村史』（p203）にある。長慶天皇の御陵をひた隠しにしていた。



上皇宮

### 史料4

さらに『和田家文書』「寛成天皇之事」によれば、

「秋田境上磯東日流境に長慶平ありて、加之地に丑寅之御所を二年に涉りて寛成の御門を御成せしむ跡ぞあり。是を長慶平とて今に遺りき」とある。この史料から、長慶天皇が丑寅東日流に入るに際し、日本海を深浦に上陸し、二年を経て吾妻川を上り相馬に到着したのであろう。相馬とその南に位置する大館市の山並みは県境であり、その稜線に長慶ノ森、長慶峠と御門の名を冠した深山の山が連なる。

以上からすると、五所川原の地名譚は御所川原であつたと、確信している。『地名辞典』は改めなくてはならない。

(注1) 『東日流外三郡誌』第二巻八幡書房 456 p

(注2) 『東日流外三郡誌』第二巻八幡書房 451 p

(注3) 『和田家資料』陸奥史審抄全ネット和田家資料

## 古代史コラム No. 1 「大作家」AIと会話して

世田谷区 國枝 浩

AIの一種らしいが、「Chat GPT」の存在を知って試してみた。「古田武彦氏をご存知ですか？」と何回か問いかけると、要領よく氏の説をまと

めたり、ときには著作の紹介などが行われる。批判めいた答えはほとんど返ってこない。東京古田会について問い合わせると、過去の研究会の紹介や、古田会のホームページが出てきた。

そこで、「大作家」の読み方を尋ねてみた。以前から気になっていた問題だ。次のような仕方だ。(ここに言う「冢ちょう」は「塚」、つまり「墓」のこと)

**私の質問**：魏志倭人伝の卑弥呼の墓が作られた場面で、「大作家」と記述されているが、読み方は次の三通りが候補に挙がるだろう。

- 1、「大きな墓を作る」
- 2、「大きく墓を作る」
- 3、「大いに墓を作る」(「大いに」は「二所懸命」という意味)

**AIの回答**：簡単に言うと、1、は物理的に墓が大きいことを表しており、「文脈から考えると、大きい墓を作るが適切と考えられる」になる。2、も同様に墓が大きいということである正しい読みになる。

AIのこの回答は卑弥呼の墓は大きくないといけない、例えば、箸墓古墳のような前方後円墳のように。通説を念頭に置いての応えであろう。そこでこの回答に対する私の意見

を次のようにぶつけてみた。

**私の見解**：頂いた回答は予想通りのものだった。多くの解説書が「墓が大きい」という意味に理解しているからだ。

しかし、1、は文法的に無理がある。「大きな墓を作る」という読み方になるためには「作大冢」の順に並べなければいけない。「大きい」が形容詞であれば「冢」という名詞を修飾することになり、「冢」の前になければならない。よって、1、は拙い解釈です。

また「文脈から考えると」という回答は、卑弥呼の墓は「大きくなければいけない」という先入観を持って読むということではないのか。卑弥呼の墓が「大きい」という文脈は「大」の字からもたらされたものでしかない。「大」の字の品詞や意味を解釈する段階で「大きい」という形容詞的な意味を無条件に持ち込むのはいかがなものか、と。

その後、2、と3、の優劣を論じ、3、が正しい読み方だという私の見解も伝えた。

私が3、を支持していた理由は「大」は「作」という動詞の前にある。「大いに(二所懸命)」ならばそれは副詞で、「作る」という動詞を修飾している、よって「作」の前に無ければならないと考えたからだ。「大」は「作」

の前にある。「冢」の前にはない。よって「大」は形容詞ではなく副詞である。そこで、私は3、が正しいという結論に達したのであった。

実は2、の読み方はごく最近、ある本に出ていたもので、「一瞬」そういう読み方もあるのか」と思ってた。なんだ。しかし、果たして「大きく」は副詞なのかは疑問だという考えに至った。「英語に訳してみよう」。中国語は文法的には日本語より英語に近い(注)。

「墓を大きく作る」は、*They made her tomb large.* 英文法で習った「STOC」という第五文型だ。

ここでの「冢」と「大」が意味上の主語と述語の関係になる。*Her tomb is large.*

「large」は形容詞としての働きである。ということは「墓を大きく作る」の「大きく」は「墓」の後ろに来なければならぬ。「大きく墓を作る」ならば「作冢大」の語順になる。よって2、は正しい読みではない。このようにAIに伝えた。

**AIの第二回目の回答**：「おっしゃる通りです。文字通りに解釈すれば、大いに墓を作る。二所懸命に墓を作るが最も自然です」と。

あっけなく同意されてしまった。



もつとA Iからの突っ込みも欲しかった。それと同時にA Iも柔軟な姿勢を持つているのだなとも感じた。

しかし、通説的理解に対してA Iが異論を提示したことになるのだが、「それでいいのか」とA Iの立場が心配にもなった。人間なら「首になる」かもしれない。

いずれにしても、これからもA Iと「会話」していこうと思う。A Iにもっと賢くなってもらい、そこからさらに学ばせてもらおうという魂胆があることも告白しておこう。

ところで、卑弥呼の墓が大きいか否かは、この「大作家」という一文だけからはわからない。大きいかもしれないし小さいかもしれない。しかし歴史の「文脈」から言えば、薄葬令を打ち出した曹魏と交流のあった卑弥呼の王権が「大きな墓を一所懸命作るとは思えない。逆に、「大きな古墳」をたくさん作った古墳時代の近畿やマトの勢力は、中国との付き合いがなかったことを証明しているのではないだろうか。

(注) 古田島洋一氏の『漢文訓読入門』(明治書院)も、漢文と英文との文法上の類似性を強調している。漢文を学ぶ上で好著であろう。

## 「東京古田会」月例会報告⑨

※文責：新保 高之

●二〇二四年十月度 堀留町区民館  
参加者：会場16名、リモート12名

第一部(研究発表と懇談会) 司会は  
斎藤事務局長

【研究発表】〈デイスカッション〉「倭国」と「日本国」(橋高修副会長) (一) 目的：二〇二四年度古代史セミナーパネルデイスカッションに向けての予行演習。(二) 内容：①橋高副会長が三つの論点を説明。②基調講演として國枝氏が「十一月セミナー出席者へのアンケート票を使って要点抽出と自説を紹介。③副会長を皮切りに、会場参加者が各自の意見を発表し、議論に発展。(三) 質疑等：①論点うち、政権移行と国名「日本国」の使用時期について意見・議論が集中した。結局は、各自が持論を展開しただけで終了に。(発表・議論等百分)

【懇談会】 ①デイスカッションと秋

の旅行会「語部と歩く東日流」案内を組み合わせ、安彦会長が配布した『和田家文書』に記載された唐書には、なにが書かれているか。について解説。その後に、②当該旅行計画の行程とルートについて説明があった。

(説明他二〇分)

第二部(勉強会と読書会) 司会は新  
保幹事

【勉強会】「古田武彦『失われた九州王朝』その十」(一) 対象：全体のまとめとして、①「はじめに」、②序章「連鎖の原理」、③ミネルバ書房復刊版「はしがき」。(二) 要点：氏の本書執筆時点での研究方法・姿勢を改めて確認し、三八年後に示された解釈の妥当性を検証。(三) 質疑等：④に関連して「廃評建郡」で朝鮮半島で使われた「評」は軍事的な役所のことを言っている、との解説があった。(解説・質疑三〇分)

【読書会】「岩波文庫『日本書紀』天武天皇紀下その十」(一) 対象範囲：全体のまとめ。(二) 内容：①主要記事(十二件を抽出)と業績(通説を紹介)、②天皇の行動歴(五四回、飛鳥宮周辺のみの動き)、③詔の様相(対象者を七分、内容を六分)、④外交記事(新羅・高麗・耽羅との通交)。(三) 質疑等：①に関して、「九州王朝弱体化の背景になった地震の多発(白鳳筑紫や土佐南海などの大地震)を加えて欲しい」との要望、また④に関して唐とは貿易や仏教学問の部門で交流があった可能性を指摘する意見も。(解説・質疑三〇分)。

●二〇二四年十一月度 新富区民館  
参加者：会場10名、リモート8名程  
第一部(研究発表と懇談会) 司会は斎藤事務局長

【研究発表】A. 「邪馬壹はヤメとも読める」(尾関育三氏) (一) 発表内容：中国上古音・中古音の解説として、反切という音写の方法(二文字の組合せで、ある文字の語頭子音に次文字の主母音を組み合せ、音を構成するもの)がある。これによれば「邪馬壹」はヤメ、「邪馬臺」はヤメに近い音になる。(二) 質疑等：①この研究を今後どう発展していくのか。②これを利用した古代地名や人名の見直しは。③中国古代音の音韻復元可能限度に意見の相違があった。(三) 感想：結果だけで終わるのは勿体ない。(発表・質疑三〇分)

【研究発表】B. 「古田武彦記念古代史セミナー二〇二四年」(橋高修副会長) (一) 発表内容：①実行委員長挨拶、②中村修也氏特別講演、③このセミナーがめざすもの、④基調講演及びパネル参加者による論稿発表、⑤デイスカッションと中村氏講評、⑥実行委員長講評、などについて簡潔な報告と解説。(二) 質疑等：会場から「日本中央碑」に関する言及がなかったことへの疑義が出たが、この碑

の古代史上の位置づけに意見の隔たりがあるように感じた。(実質発表・質疑四五分)

【懇談会】 会場参加者から「中高年生に向けた古田史学のわかりやすい古代史の書籍をまとめている」との話があったが、時間配分の都合で資料配布と説明は次回に。(説明他五分)

第二部(勉強会と読書会) 司会は新保幹事

【勉強会】 「古田武彦『盗まれた神話』その一」(一)対象は、①いわゆる「初期三部作」について、②目次と各章・節群の概要紹介、③本文(はじめに)第一章「謎にみちた二書」第二章「いわゆる戦後史学への批判」第三章「記・紀」にみる九州王朝」。

(一)説明内容は、③に関して各節群等からその要点を抽出して解説。

(二)質疑・意見等として、一九七一年発刊後に「和田家文書」や稲荷山古墳の「金錯銘鉄剣」などで得た知見を踏まえ、先生の解釈等をみていく。

(実質解説・質疑三〇分)

【読書会】 「岩波文庫『日本書紀』持統紀その一」(一)対象範囲と内容…①持統紀の構成(各年条の行数と記事数、持統紀の後半に特徴)、②即位

前紀(十一年の各年条の主要記事、③補注(一四項目の特徴)、④即位前紀(原文・注釈・留意事項・現代語訳(宇治谷編「現代語訳」)を提示して説明。(二)質疑等…八年条の「藤原宮遷居」は遷都や遷宮と表記が異なる。使い分けの有無を確認へ。(実質解説・質疑二〇分)

## お知らせ

【月例会・今後の予定】

●2月月例会

日時：2月22日(土)午後1時～5時  
会場：浜町区民館 洋室5号

(オンライン参加できます)

【第1部】

\*研究発表

発表者：藤田隆一氏

テーマ：『先代旧事本紀』について

\*懇談会 フリートークキング

【第2部】 新保高之氏

\*勉強会 古田武彦論稿より

『盗まれた神話』その4

\*読書会 日本書紀を読む

『持統天皇紀』その4

●3月月例会

日時：3月29日(土)午後1時～5時  
会場：古田会HPでお知らせします。

【第1部】

\*研究発表

発表者：石田泉城氏

テーマ：「縄文人のDNA」

\*懇談会 フリートークキング

【第2部】 新保高之氏

\*勉強会 古田武彦論稿より

『盗まれた神話』その5

\*読書会 日本書紀を読む

『持統天皇紀』その5

●『和田家文書』研究会

\*日時：3月8日(土)午後2時～5時

\*会場：古田会HPでお知らせします。

(オンライン参加できます)

\*テーマ：『和田家文書』から見えてくる蒙古襲来

\*『和田家文書』研究会は奇数月の第2土曜日に開催。(11月を除く)

●「東京古田会ニュース」

原稿募集！

東京古田会では東京古田会ニュースへ掲載する論文・小論・古代史雑感などを募集しています。住所・氏名を必ず明記のうえ、500字から5,000字程度にまとめて、Eメールにて左記へお送りください。ただし、特定個人への中傷や古代史と無関係な場合は掲載をお断りすることがあります。予めご了承ください。また、他紙などへ既に投稿しているものとまったく同じ内容の原稿は原則として掲載でき

ません。掲載の可否については編集会議で決定させていただきます。(Eメールアドレス)

saitaka7078@yahoo.co.jp

川崎市 斎藤隆雄迄

●東京古田会HPにご意見お寄せ下さい 6月より新たに模様替えしたHP。種々のお知らせやトピックスなど好評です。お気づきの点がございましたらご意見お寄せ下さい。

【新入会員募集】

東京古田会は新規会員を常時募集しています。古田武彦や古代史に興味のある方、どうぞお気軽にお問合せ下さい。また、入会ご希望の方や、本会にご興味のある知人・友人の方をご紹介ください。入会希望の方は事務局に電話又はメールで住所・氏名等ご連絡ください。年会費は4千円になります。

●編集後記(斎)

和田家文書備忘録の「弘前市相馬の長慶天皇陵」は貴重な史料。従来宮内庁は京都嵐山を陵墓としているが明確な資料に基づく比定ではなく近親者が京に戻っている事からの推定の模様。岩木川の氾濫で御所が流された事での「御(五)所川原」の地名譚。思わず膝を打ちました。